

2020年度

県予算案

湖国

県立河瀬高校(彦根市)二年生のコミュニケーション英語の授業。「犬の品種改良のメリット、デメリットを話し合いますよ」。担当の浜川綾教諭(四七)が英語で呼び掛けると、生徒たちは四五人のグループで話し合いを始め、グループの一人が、出た意見を手元のタブレット端末に打ち込んでいく。「嗅覚に優れた犬を生み出せる」「病気のリスクがある」などと入力した英文は、リアルタイムで黒板に設置されたスクリーン上に次々と映し出された。

授業を受けた橋本観さん(一七)は「皆の前では意見を言いにくくても、タブレットに入力するのであれば、発言しやすい。普段あまり発言しない人の意見も聞ける」と話す。浜川教諭も「生徒が何を考えているのかが集約され、瞬時に把握できるのが良い」と手応えを語る。

同校では教員らが必要性を訴え、二〇一八年から情報通信技術(ICT)を導入。パソコンの画面や教科書など紙媒体の資料をスクリーンに映し出すための「電子黒板機能付きプロジェ

④ 教育・授業にICT導入

無線LAN整備10億8000万円

県教委は予算案で、県立高校や中学校、特別支援学校でICT機器の導入を進める事業に、十億八千九百六十万円を計上。このうち、十億円以上は校内の無線LANを整備する費用に充てる。

クター」などの機器を三十六教室に設置し、生徒用のタブレット端末も八十台導入した。教員らは、板書をする代わりに教科書や地図などをカメラを通してスクリーンに映し出し、

スクリーン上に電子ペンを使って重要なポイントを書き込むなどして機器を活用。同校でICT活用を担当する久保川剛宏教諭(三七)は「ICT機器は魔法の道具ではなく、必要性に応じて

使うことが大切。板書の負担が減るなど授業を効率的に進められ、実践に時間を多く取れるようになった」と評価する。一方で、活用上の課題もある。タブレット端末をインター

生徒の主体性育成へ

ネットに接続する回線の通信速度が遅く、タブレットで動画を再生することが難しかったり、生徒全員が同時に意見をインターネット上に書き込むことができないこともある。

また、生徒の提出物をオンライン上にアップロードし、生徒がタブレット端末を通してお互いの提出物を閲覧し、相互に評価するなどの取り組みもあるが、全体としては教科書の内容をより効率的に教えることが、ICT機器の主な活用法となっている。久保川教諭は「生徒がICT機器を使って意見交換や発表をするなど、主体的な学びにつながる活用法も研究していきたい。将来的には、教科書の知識を教えるという認識自体を、払拭する必要もあるかもしれない」と話す。

県教委は二〇年度、全県立学校に無線LANを整備する。ただ、県教委教育総務課によると、回線の通信速度はこれまでと変わらない見込みで、高速回線の整備も今後の課題となりそうだ。さらに機器を整備するだけでなく、それらを生徒の主体的な学びにいかにつなげていくのかも、問われている。



グループで話し合いながら、出た意見をタブレット端末に入力する生徒(手前右)。入力内容は前方のスクリーンにリアルタイムで表示される=彦根市の県立河瀬高校で

また、県立高校では、各校に約四十台ずつタブレット端末を配備し、授業で一人一台ずつ端末を

使えるようにする。特別支援学校では、小学五、六年、中学一年の全児童生徒分のタブレット端末を配備。画像などを拡大して表示するためのカメラとプロジェクターも五十六台導入する。